日本中国語学会々報　2019年12月

https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶　大西克也（会長）……1
2019 年度全国大会総括……2
2019 年度学会奨励賞の選考経緯……4
理事選挙開票結果報告……5
支部例会実施報告　2019.6 - 2019.12……6
会議報告……14
例会および全国大会開催のお知らせ……21
『中国語学』電子版発行のお知らせ……21
事務局からのお知らせ……21
［資料］日本中国語学会著作権規定（2019 年 11 月改訂）……23

ご挨拶　大西克也（日本中国語学会会長）

2019 年 11 月 2 日、3 日両日、今年度の全国大会がお茶の水女子大学を会場に開催されました。大会開催まで 1 年半を切る時点での依頼にも拘わらず、快く引き受けてくださった伊藤さとみ先生をはじめとする開催校のすべてのスタッフの皆さん、また大会運営委員会の皆さんには心からお礼申し上げます。お茶大中文の語学関係の教員のみならず、文学関係の先生方からもお力添えを頂き、研究室が一体となって支えてくださったことを実感しました。人文系の教育・研究体制は縮小の一途を辿るばかりですが、古くから続く研究室の良き伝統も維持されることを願います。

さて、今年 9 月 7 日に東京大学文学部を会場として、本学会主催の第 1 回中国語学セミナーが開催されました。講師を務めてくださったのは、岩田礼会員、木村英樹会員、木津祐子会員の 3 名、いずれも会長経験者です。この事業は昨年 5 月の理事会で私からの提案を認めて頂き、小野秀樹理事を座長とする WG のご尽力により実現したものです。

2 年前の選挙で会長に選出されて以来、本会の活動は研究面ではかなり充実しているが、それだけでよいのかという問題意識を持ちました。研究発表だけが会員交流の場ではなく、たとえば第一線で活躍する研究者が、実績を踏まえて、それぞれの分野における中国語の面白さを分かりやすい言葉で語り、成果を分かち合う場があっても良いのではないでしょうか。大学では人文学が縮小し、非常勤講師や集中講義を十分に設けられず、若い人々が学外の研究者に接する機会も限られてきてい

ます。学会としてそれを補完することも必要と考えたのです。初回は幸い 60 名を超える参加者に恵まれ、好評のうちに終えることができました。次年度以降、場所を変えて継続する予定です。どうぞ奮ってご参加ください。

私の任期も残すところ半年を切り、新会長に選出された小野秀樹会員に無事バトンを託すべく、気を緩めずに運営に当たりたいと思います。ご協力、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

2019 年度全国大会総括

Ⅰ．今年度大会総括

第 69 回大会は、お茶の水女子大学（東京都文京区）を会場に、11 月 2 日（土）と 3 日（日）に開催された。

（1）参加者数

参加者総数は 269 名、うち一般参加者が 267 名、招待者 2 名であった。書籍展示は 16 社（賛助会員 13 社、それ以外 3 社）であった。

（2）総評

今年度は昨年度と同じ 11 月第 1 週末に開催された。この時期の東京は好天に恵まれることが多いが、当日は最高気温も 20 度と、過ごしやすい天候での開催となった。お茶の水女子大学で開催されるのは 1999 年の第 49 回以来 20 年ぶりである。交通をはじめとする多くの利便性に恵まれ、かつ静かな環境が約束されるという、その卓越した立地条件は当時と変わっていない。主会場となった共通講義棟へ至るキャンパス内の路地で、深まりゆく秋の静けさを感じた参加者もおられたのではなかろうか。

お茶の水女子大学の教職員・学生スタッフの皆さまには、大会当日へ至る長期間にわたり、周到な準備を行っていただいたことに、衷心より感謝申し上げたい。終始穏やかな雰囲気の中で大会を進行することができたのは、ひとえに開催校スタッフ各位の並々ならぬご尽力によるものである。

今回は開催校の安全規定により、入構者は毎回正門で本人確認を求められることになった。そのことへの対応では、学会理事会と事務局から力強いご協力を頂戴した。また、開催校スタッフには大会当日に正門にて誘導に当たっていただいた。入構に関して現場で混乱が生じることなく、無事に大会を終えることができたのは、各方面からのお力添えの賜物である。併せて心よりお礼を申し上げる次第である。

大会 1 日目は、開会式と学会奨励賞授与に続いて、形式意味論による中国語研究で著名な林若望教授と潘海華教授の招待講演が行われた。

中央研究院の林若望教授は、比較構文について、“比～”を付加詞とする分析と、等位接続構造とする分析を紹介され、両者ともいくつ

かの言語現象を説明できない点で不備があり、Lin Jo-wang 氏が 2009 年に提案した、“比～”をフレーズとする分析に妥当性があることを述べられた。

香港中文大学・北京語言大学の潘海華教授は、“的”字構造について考察を展開され、“的”は多岐にわたる用法を持つが、その機能は非<e,t>タイプの成分を<e,t>タイプに変え、<e,t>タイプである名詞の表す対象との交わり演算を行うことにあると述べられた。

質疑応答では、両講演者より互いに理論的な質問がなされ、盛況のうちに終了した。また、立ち見の聴衆が多数出現したことからも本講演に対する注目の高さが窺えるが、これについては椅子 10 数脚を会場に搬入することで対応がなされた。

ワークショップは、今年は 2 グループがセッションを行った。

伊藤さとみ会員の企画による「現代中国語の複雑構造における焦点の問題」では、一般的な焦点の定義などが説明された後、焦点の音声的実現、焦点が複文の意味解釈に与える影響、焦点化副詞“就”が重ね型の意味に与える影響が各発表者より述べられた。引き続き、発表者によるディスカッションとフロアからの質疑応答が行われ、ディスカッションでは各発表者のテーマの関連や応用が、質疑応答では例文の解釈などが議論され、密度の濃いワークショップとなった。

鈴木慶夏会員の企画による「ユーザー中心の中国語教育文法設計に向けて」では、趣旨説明が行われた後、文法項目を巡る文法学と言語教育学との違い、比較構文を例とした教育文法の設計について報告がなされた。斬新なテーマを巡る貴重な機会であったことは言うまでもないが、ワークショップ運営の新しい試みとして、大会予稿集に QR コードを掲げ、スマートフォンでの読み取りを介して Google フォームの質問記入表にアクセスする方法が採用されたことは特筆に値する。参加者は発表を聞きながら質問・意見を送信することができ、大変充実したワークショップとなった。

ワークショップは数年前に応募数が漸減し、存続を危ぶむ声も出ていたが、今年度は昨年度と同じく 2 件の応募があり、小康を保っている。来年度も会員各位の積極的な応募を期待したい。

大会 2 日目は分科会とポスターセッションが行われた。発表件数はそれぞれ 49 件（内 1 件は辞退）と 8 件である。ポスターセッションは昨年と同じく昼前の時間帯に開催され、活発な議論と交流が行われた。

開催校のご尽力により、今年度も託児所を設けることができた。心からお礼申し上げたい。利用者は 2 名であった。託児所の設置は、大会参加に伴い生じる会員の負担を軽減するという意味で、大会を支える基盤の 1 つであると考えている。来年度も開催校と協力しながら、託児所が設置できるよう努めていきたい。

予稿集の編集作業は、昨年度の会報に記されたとおり、昨年度より本委員会が全面的に担うことになった。今年度は 2 年目であり、ノウハウは着実に蓄積されつつある。今後は、今年度より始まった予稿集電子化にも対応しつつ、大会のより理想的な姿を目指していく努力が求められる。なお、予稿集電子版の公開は、ウェブリソース委員会の積極的な協力態勢なくしては実現できなかった。ここに深謝申し上げたい。

（3）改善点・反省点

本委員会では毎年大会後に総括を行い、改

善や反省を要する箇所の確認、およびそれへの対応や行動を巡る議論を行ってきた。今年度は以下のような問題点が見られた。

ワークショップや分科会で、プロジェクターによる投影資料が予稿集から逸脱している発表が複数件見られた。逸脱とは具体的には、①題目の不一致、②内容や例文の追加、③例文番号の変更や不一致、である。これらについては、司会者の判断でその場で発表者に対して注意を行った。これまでにほぼ毎年見られてきた現象であり、今年度は予稿集執筆要領に「PowerPoint 等を使用する場合，予稿集原稿の章節通りにスライドを作成すること」「例文等の追加や順序変更を行ってはならない」という注意事項を付加したが、それでも再発したことは残念である。どのような対策がより効果的か、本委員会として引き続き検討していくことにする。

昨年度の会報で予告されたとおり、今年度より予稿集は冊子体の他に電子版でも発行されることになった。電子版は全体不分割のファイルと各論毎のファイルの両方が作成された。今年度は電子版の公開日について、開会日の 1 週間前という目標を達成できなかった。電子版の宣伝方法も工夫する必要がある。また、全体不分割のファイルには、目次から特定の発表に移動できる「しおり」を付す必要がある。来年度はこれらの課題を実現すべく、本委員会として鋭意取り組んでいく。

また、分科会の数や講評システムについては、最新の動向に留意しつつ、適正な状態を維持すべく、今後も分析と検討を続けていく。

Ⅱ. 来年度の全国大会にむけて

（1）来年度の第 70 回大会は愛知大学名古屋キャンパス（名古屋市中村区）で開催される。開催日は未定であり、追って学会ウェブサイトで公表する。

（2）70 回という節目の大会であるため、記念大会という位置付けにする。具体的な企画については、開催校と大会運営委員会とで検討する。

（3）ワークショップの応募に関しては、例年どおり 2 月末までに学会ウェブサイトに応募要項を掲載する予定である。

（4）来年度も研究発表の応募規定は学会ウェブサイトでの告知のみとする。例年どおり 4 月初旬に学会ウェブサイトに掲載するので、その要領に従って応募されたい。

（5）今年度より予稿集の電子化を実施した。来年度も冊子体と電子版を発行する。電子版は開会日の 1 週間前までに公開する予定であるので、留意をお願いしたい。

（6）来年度から予稿集原稿用のテンプレートを用意する。発表者はそれを使用して原稿を作成されたい。

（大会運営委員会）

2019 年度学会奨励賞の選考経緯

編集委員会では、2019 年 3 月の第 1 回編集委員会において、『中国語学』265 号に掲載された論文の中から学会奨励賞の選考対象とする論文 2 本を選出し、さらに 5 月に開かれた第 2 回編集委員会において、選考対象論文 2 本について慎重な協議を行った結果、以下の

論文を 2019 年度の学会奨励賞受賞論文の候補とすることに決定し、この案が理事会において承認された。

学会奨励賞受賞論文
市原靖久氏（東京大学大学院）
上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について

【選考の経緯】

本論文は、これまで一世紀以上にわたり多くの研究者が取り組んできた上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”の生起条件の問題について、新たな仮説を提示したものである。述語をその意味的特徴から「状態」と「出来事」に分類した上で、それぞれの述語を持つ文に二つの代名詞が生起した用例について、当該代名詞が担う意味役割に着目した検討を行い、“我”は主題者や対象者の役割を担う主体性の薄い、他者を視野に入れた相対的・客体的な代名詞であるのに対し、“吾”は動作主や経験者の役割を担う、実感の伴った主体的・個別的な代名詞であるとの結論を導き出している。

この結論は、二つの代名詞と述語が知覚動詞であるものとの共起関係、“未”や“矣”など時間性を表す語彙との共起関係といった種々の傍証にも支えられており、大きな説得力を備えている。また、この視野の広い仮説は中国語学のみならず一般言語学の世界に対しても興味深い材料を提供するものであり、その意味においても高く評価することができる。

選考の段階においては、本論文が主に扱う『論語』『孟子』『左伝』以外の文献において仮説を検証する必要があること、二つの代名詞の区別が後漢以降次第に崩壊していく原因についての解明が望まれること、などの問題点も指摘された。しかしながら、これまで多くの研究者が頭を悩ませてきた問題に敢えて挑み、その解決の糸口になる可能性を秘めた仮説を独力で提示したことの意義は大きいとして、編集委員会は全員一致で本論文を奨励賞受賞論文として推薦し、理事会においてそれが承認された。

今後は、より精緻で一般性の高い理論を構築することを目指して、ますます研鑽されることを期待する。

（編集委員会）

理事選挙開票結果報告

第 69 回全国大会第 1 日（お茶の水女子大学、2019 年 11 月 2 日）に理事選挙が行われました。開票の結果、以下の方々が次期（2020-21 年度）会長および理事に当選されました（「会長及び理事選出に関する内規」参照）。なお副会長につきましては、後日新会長が理事の中から委嘱することになります。当選者並びに各得票数は以下の通りです。

■投票総数 : 537 票（うち、有効投票総数 532 票、白票 112 票、無効票 5 票）

■得票数 :

1. 小野　秀樹　　50（会長）
2. 楊　　凱栄　　32
3. 古川　　裕　　23
4. 伊藤さとみ　　14
5. 遠藤　雅裕　　13

6.　吉川　雅之　　12
7.　秋谷　裕幸　　11
8.　丸尾　　誠　　11（以上理事）
次点　下地早智子　　11

（内規により同票数は年長者が当選となります）

（選挙管理委員長　佐々木勲人）

支部例会実施報告　2019.6 - 2019.12

◆北海道支部例会

◇2019 年 9 月 20 日（金）小樽商科大学 3 号館 301 講義室

・恵詩文（新潟大学・院）:“(是）～的”構文と“～了”構文の発話意図の相違に関する研究

吕必松（1982)、劉月华（1983）は“(是）～的”構文を次の二種類に分けている:（i）強調を表す“(是）～的”構文、(ii）話し手の意志を表す“(是）～的”構文。強調を表す“(是）～的”構文は基本的に、すでに発生した動作について説明する場合に用いられる。中国語の表現には他の言語のような動詞の「過去形」という語尾の変化形態がないため、すでに発生した動作について説明する場合に“(是）～的”構文が用いられることが多い。一方、中国語の表現においては、“～了”構文も“(是）～的”構文と同じようにすでに発生した動作を表すことができる。本研究では話者の発話意図からこの二つ表現について意味上の区別を明らかにしたい。

・黄冬思（新潟大学・院）：結果補語“V 尽”の意味的な分析を中心に

“尽”は動詞として使われていた。現代に至ると、“尽”が動詞の後ろに付着し、結果補語として使われるようになった。“尽”の意味的な特徴を明らかにするため、本研究は、結果補語“尽”を 3 つに分類し、その意味的な特徴を解明した。まず、自然現象を表す名詞と共起する場合を“尽 1”とする。主語が「ある」の状態から「なし」の状態に至るまでの変化を表す。そして、感情を表す抽象的な名詞と共起する場合は“尽 2”と見なす。感情の有無を強調するのではなく、感情の極値に焦点を当てている。最後に、量的なものを表す名詞と共起する場合を“尽 3”の使い方とみなす。動的な過程を表すというより、最後の結果が注目されている。

・丁雷（釧路公立大学・講師）：谈谈轻声应该怎么教-如何评价轻声字的发音质量-

声调在强度和长度方面的突然弱化被看做是一种特殊的语音现象，由此衍生出了“轻声”、“轻音”和“轻读”三种表现方式。对这种特殊的语音现象的描述，最早可以追溯到记录公元 8、9 世纪中国西北方言的相关文献里。方言中的这种语音现象也反映在作为“标准语”的“普通话”里，我们通常用“轻声字”来表述。近年来，普通话里“必读轻声字”的数量在减少，“可读轻声字”的数量在增加。人们意识到要控制轻声字数量的同时，却忽略了对轻声字教学的探讨。如何教轻声，如何让外国学生接受这种语音现象，如何让他们区分声调和轻声，如何正确评价他们的轻声字发音。本研究认为对这些问题的研究，需要从探讨“轻声教学的意义”和“轻声教学的时机”开始。

・山口莉慧（苫小牧駒澤大学・講師）：中国インターネット SNS における日本語由来の流行語の特徴

明治以来、中国語に流入した日本語の語彙は非常に数が多いが、最近の中国におけ

るインターネットの急速な普及によって、百度などの SNS で日本語由来の単語が流行語になる例が増加してきた。本発表では、最近の日本語由来のインターネット流行語について、インターネット流行以前の日本語由来の中国語の語彙についての先行研究で示された日本語由来の中国語の語彙と比較して、中国インターネット SNS における日本語由来の流行語の特徴を明らかにする。具体的には、2018 年 12 月に『人民日報』が発表した〈2018 年十大流行語〉に選ばれた『佛系』という単語について分析する。

・山田大輔（北海道大学・研究員）：中古漢語の〈疑問〉を担う副詞“豈”、“寧”、“頗”の使用分布及びその機能に関する一考察

中古漢語において、“豈”が〈疑問〉を表す場合にもよく使用されるようになったこと、また、“寧”、“頗”が〈疑問〉を担うようになったことはよく知られているが、それらの使用分布や機能については、まだ明らかになっていないところが多い。本発表では、中古期の漢訳仏典・非漢訳仏典の用例を広く調査した上で、①“寧”と“頗”が〈疑問〉を担うようになったのは、漢訳仏典から始まった、②“豈”、“寧”、“頗”の〈疑問〉の機能は、従来は〈推量疑問（推度詢問）〉とまとめられることが多かったが、実際には、いわゆる〈確認要求〉であったり、話し手が見込みや期待をもっていることを表すものである、ということを指摘・主張する。

◆関東支部例会

◇2019 年 6 月 1 日（土）東京大学駒場Iキャンパス 1 号館 101 教室

・程建敏（新潟大学・院）：可能助動詞と可能補語に関する研究―特定の構文との共起関係を中心に―

構文の視点から可能助動詞と可能補語について論じる先行研究はまだ少ない。郭春貴（2014）や杉村博文（1979）は、“把”構文は可能補語と共起しにくいと指摘している。さらに杉村博文（1979）は、条件構文の場合、可能補語より可能助動詞のほうがずっと好まれるとも指摘している。しかし、両者とも、“把”構文や条件構文以外の構文に関しては論じていない。一方、筆者がコーパスの例文を収集しているうちに、可能補語と共起できる条件構文も多く存在することを発見した。そこで、本発表では、可能補語と条件構文との共起関係について再検討する。また、可能助動詞と可能補語の、“被”構文や使役構文、比較構文との共起関係についても考察していく。

・劉妍（新潟大学・院）：否定詞による動詞の一分類

否定詞“不”と“没”の意味的相違について、多くの先行研究があるが、動詞との共起可能性についての研究はまだ少ない。刘月华(2001)は、“不”や“没”で否定することができるのを動詞の一つの文法特徴として記述しているが、どんな動詞を“不”で否定し、どんな動詞を“没”で否定するのかを詳しく説明していなかった。そこで、さまざまな用例を考察すると、“难免”“铭记”など“不”や“没”で否定できない動詞もある。本発表では、否定表現の“不”と“没”に着目して、動詞の新たな分類を打ち出すことによって、非中国語母語話者が中国語を理解する上での有益な知見を提示したい。

・森広江（首都大学東京・院）：『閩都別記』にみる借用字

『閩都別記』とは清乾嘉年間に完成したとされる長編章回小説であり、福州をはじめとする閩東方言地区で広く読まれていた。その具体的な成立年間や作者については解明されていないが、福州方言を用いて民間伝説、故事、ことわざ等を記録した貴重な言語資料と位置付けられている。この 401 回、述べ 110 万字にも上る地方方言小説の言語価値を高く評価する研究者もおり、

近年では語彙を取上げた論文が見られるが、依然として先行研究が少ないのが現状である。本発表では、福州方言の先行研究を踏まえ、作品に付録されている「榕腔白話文」の語彙や借用字などに焦点を当て、その使用状況を整理し、『戚林八音』や現在の方言との異同を追って行きたい。

◇2019 年 9 月 28 日（土）文教大学越谷キャンパス 3 号館 3301 教室

・宋承澤（新潟大学・院）：可能を表す助動詞“能”に関する研究―蓋然性を表す性質を中心に―

“能”の基本的な性質は既に明らかにされているが、“能”における「蓋然性を表す」条件については研究の余地があると考える。魯暁琨(2001)は“能”の“根源意义”と“判断意义”という概念を提唱した。例えば“他能给你买戒指吗？”、“我明天能过来。”の“能”は文面のみで判断すると、単純に動作主の「能力」(根源意义)について述べていることになるが、口調と文脈によって蓋然性の意味(判断意义)が表現される。本発表では、口調と文脈関係という観点から“能”を分析し、“能”の“根源意义”と“判断意义”の区別方法とその転換条件を提案する。また、蓋然性を表す“能”と“会”も比較する。

・楊洋（新潟大学・院）：進行相における“V+着”に関する研究―副詞と共起する場合を中心に―

現代中国語には、動作の進行、持続と残存の状態を表す“V+着”という文法構造がある。高增霞（2005）や龔千炎（1991）によれば、“着”は動詞と密接に結びついており、副詞、介詞フレーズなどの成分を入れることが難しい。しかし、動詞と“着”の間に副詞などを入れることは難しいが、他の位置では副詞と共起できるかどうかは論じられてはこなかった。本研究は、BBC や CCL の文学作品から収集した“V 着”が含まれている対象語例を 988 例を対象に分析した結果、副詞と共起する語例は 180 例(18.2%)を占めていることを確認した。次に“V+着”と共起する副詞を頻度、範囲、時間などの 7 種類にした。最後に、“V+着”と共起できる副詞の特徴を明らかにする。

・李宛（新潟大学・院）：以时间坐标为参照点区分对比将然相诸形式

目前对于“快～了”、“要～了”和“该～了”学界已有很多研究。吕叔湘（1980）、王自强(1998)以及荒川清秀(2003）等人都对要、快、该等字进行过分析，说明了这些形式均可以表达将发生的事情，但是三人均没有将它们联系起来进行区分和对比。本论文将以将然相语项在句子中的“时间坐标”为参照点，讨论将然相“快～了”、“要～了”和“该～了”的语用区别。并且说明“要～了”的将然相形式常与固定时间空间相联系，“快～了”的将然相形式常与流动性时间空间相联系，而“该～了”的将然相形式则是与推断性时间空间相联系。并且对比说明“该”的主观将然性以及“快”和“要”的客观将然性。

◇2019 年 11 月 16 日（土）大東文化大学板橋キャンパス 3 号館 30111 教室

・胡杰（大東文化大学）：关于用于句末的“期待”

根据刘月华（1983）对动词的分类，“期待”属于状态动词，表示人的心理状态。大多数研究者也把它称作心理动词。 “期待”作为心理动词用在句末时，在学生的造句中我们经常会遇见这样的句子。比如，一个男生对班里新来的女生很有好感，所以他很期待和这个女生的下一次见面。于是男生说了“下次她来上课吗？我期待。”这句话。问题就出在“我期待。”这个句子里。改正它很简单，只要在“期待”前加一个“很”字即可。那么，光杆的“期待”为什么不能用在句末？作为心理动词的“期待”用在句末时它和整个句子是一个什么样的关系？通过对“期待”的分析，我们也将得出与“期待” 类似的心

理动词用于句末时的一般规则。

・趙葵欣（大東文化大学）：现代汉语疑问词“什么”的语法化与构式化

现代汉语询问事物的疑问词“什么”可以用于表列举。其形式有前置型“什么 A、B…”和后置型“A、B…什么的”两种。前置型列举用法在明清文献（白话小说）中已出现，而后置型出现较晚，最早用例见于明治时期的汉语教材。本研究从历时角度以明清语料为中心，考察了这两种列举用法的形成过程，认为前置型“什么 A、B…”来自“什么”的语法化，其形成机制是重新分析。后置型“A、B…什么的”则是构式化的结果。其构式义不是构成词项“什么”与“的”意义的简单相加，而是构成词项的某一部分语义滞留（persistence）并整合而成。至于何种语义能滞留则是语境压制（coercion）的结果。

・丁鋒（大東文化大学）：唐院本『九哂十紐圖』と宋刊本《九弄反紐圖》

北宋《大廣益會玉篇》(1013) の巻末に「九弄反紐圖」が付されており、中国音韻史の重要な研究資料となっている。一方、日本天台宗高僧、遣唐使円仁（794-864）の『入唐新求聖教目錄』に『九哂十紐圖』があり、「唐院本」と称す。両圖の内容は大同小異と言え、『九弄反紐圖』の原型は「唐院本」時代の約 150 年前に遡る。本発表は両圖の異同を分析し、構成の調整、圖面の進化、九弄の変遷、用字の考慮などの側面から中古音韻史の推移を探る。

・大島吉郎（大東文化大学）：《北京官話伊蘇普喻言》における常用動詞認定の試み―動詞重畳型と“把”字句を中心に―

本発表は語彙史、清末北京語研究の観点から、中田敬義訳《北京官話伊蘇普喻言》(1879)における口語常用動詞を、ある一定の条件のもとに整理しようとするものである。動詞重畳型、“把”字句を手掛かりにするのは、いずれも口語表現に傾斜していることと、常用動詞の認定を行うに当たって、定型として一種のフィルターの機能を果たすことが期待できるからである。併せて、“把”字句の述語動詞は多様な補語を取るため、個別に補語のタイプに応じて用例を採集する方法に比べて恣意性を排除できると考えるからである。しかし、この二つのタイプに現れない基本語彙としての常用動詞を把捉するためには、異なる方法を設定する必要があることを主張する。

※第十八回学術シンポジウム「日中対照研究と中国語教育」（大東文化大学中国言語文化学専攻主催）との共催です。

◆東海支部例会

◇2019 年 11 月 30 日（土）中京大学（名古屋キャンパス）5 号館 523 教室

・劉嘉勇（名古屋大学・院）：中国語の“被”構文の分類

“被”構文には被害を表すタイプと被害の意味がない中立的なタイプがある（王亜新 2016 など）。“被”構文の意味と構文形式の対応関係を明らかにするため、本研究では“被”構文を大きく有情主語“被”構文と非情主語“被”構文に分けた。有情主語“被”構文は被害の意味のみ表すのに対し、非情主語“被”構文は被害と中立の二つの意味を表す。この被害と中立の意味は連続的であり、被害の意味を支える要素は主語の有生性、動詞の動作性の強さ、行為者の特定性、アスペクト的完結性などであり、これらの要素が少なくなれば、中立的な意味に近づいていく。

・劉妍（新潟大学・院）：从与助动词的搭配看“不”和“没”的区别

《现代汉语八百词（增订本）》中提到，“‘不’可用在所有的助动词前，‘没有、没’只限于‘能、能够、要、肯、敢’等少数几个。” 但即使这几个动词，也有不能被“没”否定的时候。我们说“大蒜不能杀菌”，但不说“大蒜没能杀菌”。此外，当同一个助动词

被“不”和“没”分别否定时，其中又有一些细微的差别。本发表认为，这与助动词复杂的义项和否定词“不”和“没”自身的性质有关。“不”否定的事物有持续性，“没”否定的事物则具有一次性。本发表将对“不/没+助动词+VP”构式进行考察。首先明确助动词与“不”和“没”的搭配情况。其次归纳这些助动词不能被“没”否定的原因，以及，“不”和“没”否定同一个词时，又产生了什么差别。

・恵詩文（新潟大学・院）：“(是)……的”中“是”的位置

宋玉柱将“(是)……的”结构的作用分为三种，即表示判断，表示强调和表示过去的时间。并提出其中表示过去时间的“(是)……的”结构中的“是”字完全可以去掉而意思不变。但是有些句子例如“这是他上小学时画的。”中的“是”字其实不能省略。此外，有学者提出“(是)……的”中的“是”字和“的”字有圈定焦点的作用。即根据“是”字和“的”字位置的不同，句子的焦点也会随之变化。例如“他是昨天在商场买的。”与“他昨天是在商场买的。”本文将从焦点的角度分析“(是)……的”中“是”字的位置对句子的影响以及“是”字的省略条件。

・顧彬楠（名古屋大学・院）：否定から見る能動文と受身文の非対立－結果含意の有無を中心に－

能動文と直接受身文は、同一事象のどの関与者を中心に述べるかという立場の違いによる対立であると指摘されている（村木1991）が、受身文が否定の形をとる場合、このような対立が必ずしも成立するとは限らない。例えば、能動文“他没骗我。”は「動作主“他”が“骗”という行為を行わなかった」ことを表しているのに対し、受身文“我没被他骗。”は上の能動文の意味以外に、「動作主“他”は“骗”という行為を行なったが、被動作主“我”は騙されなかった」という意味にも解釈できる。本発表では否定形式の受身文が二つの事象を表せる原因を究明し、併せて否定形式においてのみ、このような能動文と受身文の非対立が生じる理由を考察する。

・許賢科（名古屋大学・院）：目的語の性格から見る“错 V”と“V 错”の用法について－V が動作動詞である場合を中心に－

“他多喝了一杯。”[彼は一杯多く飲んだ。]と“他喝多了。”[彼は飲みすぎた。]に見られる形容詞を状語と補語のいずれとして用いるかの差異には、動作主の意図の有無が反映されていると一般に解釈される。しかし、非意図的な行為を表す「誤って張三の服を着てしまった」を中国語に訳す場合には、“错穿了张三的衣服”（→＊穿错）のように“错穿”の語順となる。一方、“穿错”の語順となる“穿错了衣服”[間違った服を着てしまった]では目的語には裸の名詞“衣服”が用いられる。本発表では、“穿”や“买”のような動作動詞が用いられる“错 V”と“V 错”の使い分けについて、目的語の性格の相違という観点から考察する。

・李宛（新潟大学・院）：時間的座標と動相形式に関する研究－将然相諸形式の意味的相違を中心に

現代中国語では、“要…了”、“快…了”、“该…了”などの表現形式を用いて、「将然相」を表すことができる。中国語の将然相は、日本語の「もうすぐ～なる」、「まもなく～する」、「～はずだ」などの意味を表す際に用いられる。将然相などの表現形式は日常会話に多く用いられ、互いに置き換え可能な場合もある。これらの表現形式が意味するものにはどのような違いがあるのだろうか。また、置き換えることができない状況とは何か、現在も詳細には解明されていない。したがって、本発表では、主に時間座標と動相形式の差異によって“要…了”、“快…了”、“该…了”がどのように使い分けられるのか、その区分と意味の差異を中心に分析する。

・朱薇娜（名古屋大学・博士研究員）：コーパスに基づく動詞と名詞のコロケーションについてー“缩小”“缩短”を研究対象にー

“小”は二次元（面積）又は三次元（体積）の概念を表すのに対して、“短”は一次元（線的な長さ）の概念を表す。“小”又は“短”により構成される動補式複合語の“缩小”“缩短”は、それぞれ“小”又は“短”の意味特徴を継承しているが、“{缩小 / 缩短} 两国之间的在经济上的差距”のような例が示すように、両語を置き換えても大きな意味の差が生じない。本発表ではこのような現象をめぐり、コーパスを利用し“缩小”“缩短”と共起する名詞句を比較したうえで、置き換えられる名詞句の特徴を明らかにする。また“将比分差距 {缩小 / ＊缩短} 到 2 分”のような容認度の差が出る例を考察して、抽象名詞の意味領域や意味解釈の多様性を見る。

◆関西支部例会

◇2019 年 6 月 8 日（土）大阪市立大学　文化交流センター　ホール

・吴婷（関西外国語大学・院）：试论汉日反复体的差异

体，观察动作事件的内部时间构成。反复体，观察的是反复多次出现的动作事件。与其他体范畴不同，反复体具有一种双重性：观察单个动作事件时的整体性，以及观察多个动作事件时的持续性。持续性，是反复体的主要属性。本发表在先行研究的基础上，通过搜集、整理、分析语料，从汉日反复体的类型、表现手段等角度入手，对汉日反复体进行对比和分析，以揭示两者在表达上的差异。本发表的最后，探讨反复体与进行体之间的关系，并探究汉语和日语基于存在动词衍生出来的存在型体标记在“持续性”上的倾向差异。

・李日臻（大阪大学・院）：語気詞“呗”を支える前提条件

現代中国語における語気詞“呗”に関する先行研究は決して多くはない。しかもその多くは“呗”の意味論的機能についての考察であった。中国語母語話者でない学習者からすれば、いつ“呗”の使用が自然なのかが、やはり曖昧なままである。本発表は先行研究であまり触れられていなかった“呗”の使用を支える前提の解明に挑んでみたい。また、先行研究であまり重要視されていなかった“呗”の疑問文での機能にも注目し、“呗”の陳述文と依頼文で見出される機能との間にどのような関係があるのかを解明し、最終的に“呗”の中核的機能を明らかにしたい。

・李梦迪（関西学院大学言語教育研究センター）：“给”の使役用法に関する一考察

中国語の動詞“给”は主に授与の意味を表すものであるが、使役を表すこともその働きの一つとされている。これまで先行研究においても指摘されているように、“给”のいわゆる使役用法は限定的なものであり、一般的に“给”のプロトタイプ的意味である授与義と授与にまつわる実体物の存在と切り離すことができない。本発表では、「授与」と「許容」の意味のつながりに着目しながら、通時的な文献から収集した実体物の授与を伴わない動詞“给”の用法についても取り上げ、“给”の授与義と使役用法の関連性について再考察する。

◇2019 年 12 月 14 日（土）関西学院大学大阪梅田キャンパス K.G.ハブ スクエア大阪

・王珍（神戸市外国語大学・院）:“NP 前”结构的歧义问题再议

在语言运用中，名词性成分加方位词“前”“后”所构成的“NP 前（面）/后（面）”（为便于集中讨论问题，本文暂不述及“NP 后（面）”），在表达空间位置时常会产生歧义。例如，对“他站在教室前面”中的“他”的位置可有两种解释，即“他”在教室内或在教室外。当然，并不是所有的“NP 前（面）”结构都会产生歧义。在“NP 前（面）”结构中，NP 所具有的空间性特征是该结构是否会

产生歧义的主要原因。本文将根据方经民（2002）有关空间区域范畴的论述和Levinson（1996，2003）空间参照框架理论，对“NP 前（面）”和“NP+前（面）+距离”结构在语言运用中产生的歧义现象进行探讨，并分析该结构中 NP 的空间性特征以及表示距离的词语对句子的理解所产生的作用。

・申慧敏（大阪大学・院）：关于日语母语者副词“再”的偏误分析——以“再”表示程度义为中心

汉语副词“再”在 HSK 考试中属于一个重要的 4 级词汇。由于汉语中关于“再”的句式和日语表达的差异，以及诸如“才”、“就”、“更”、“还”等其他副词的影响，对日语母语者来说副词“再”是一个学习和产出的难点。本报告通过对 24 名中高级汉语学习者所实施的问卷调查结果中抽取的一部分具体偏误，对“再”表程度意义（或持续意义）时“再＋v/adj＋限量成分”这一句式进行讨论。分析了日语母语者使用该句式产生偏误的原因、汉语中该句式成立的语用和语义机制，以及从在日汉语教学的角度出发提出了两个教学建议。

・王琦（神戸市外国語大学・院）：現代中国語における“给 V”受益構文

《现代汉语大词典》(2009：1930）によれば、「“给”は動詞の前に置き、受動や処置の語気を強める」という。しかし、“给 V”の用例には、受動にも処置にも解釈できないものが存在する。本発表は、そのような“给 V”を一つの構文(construction)であると捉え、成立条件、および意味と機能面から分析を加える。例えば、“这么快就给完成任务了”は“这么快就给我完成任务了”のように理解をすることができ、“给”の後ろに補足できるのは服務の対象である。このような例は多くの口頭表現に見られ、すでに補足成分なしで構文化していることが考えられる。本発表では、口頭表現から多くの類例を示し、“给 V”構文が受益構文として文法化していることを主張する。

・徐小茜（神戸市外国語大学・院）：汉语动词性宾语的句法表现问题分析

本文将在先行研究的基础上，对动词性成分作宾语问题再做探讨。通过语料调查可以看出，动词性成分作宾语时，对谓语动词会有很多限制，即并非各类动词都能自由地充当动词性宾语的述语成分。同时，不同类型的动词对充当其宾语的动词性成分也有着不同的要求。另外，通过考察《汉语动词用法词典》中动词带宾语的情况可知，大部分动词还是以带名词性宾语为主，能带动词性宾语的动词数量较少，有一定的特殊性。总之，语言事实表明，作宾语并非动词的常规功能。我们认为，无论是从句法功能限制的角度，还是从语言成分本身的语义特征的角度来看，汉语动词都有独立的词类属性，不应被看作名词的一个小类。

◆九州支部例会

◇2019 年 7 月 6 日（土）熊本学園大学（14 号館 1411 教室）

・宋承澤（新潟大学・院）：可能助動詞に関する研究―“会”は動作主の意図と願望を表す―

“会”についての研究は数多くあるが、“会”が動作主の意志や願望を表すかどうかはまだ不明瞭である。張威(1998)は可能表現は有情物の「意図性」と関連していると述べたが、勝川裕子(2011)はこの見解を否定して、有情物の意図に関する“会”は実際には可能性・蓋然性の意味であると論じた。しかし発表者は、“会”を研究する過程で可能性・蓋然性が解釈しにくい“会”の表現形式を多く発見し(“我会尽我所能”など)、“会”はやはり意図或いは願望が表せると考える。本発表では、動作主の意図と願望を中心に“会”の作用を検討し、“会”可能性・蓋然性と意図・願望の分類方法も提出する。

・賈柱（鳴門教育大学・院）：感嘆詞“唉呀”の語義色彩について

感嘆詞“哎呀”については、『现代汉语词典』などの辞書に語義記述があり、意味機能についての先行研究もある（施俊武 2015 など）が、“唉呀”については、辞書による語義記述も先行研究も見られない。両者は日常的には区別しないで使われることも多い（例：“唉呀/哎呀，你们看，这是反标！”）が、明らかに一方しか使えない場合も存在する（例：“哎呀（→×唉呀），危险！”，“好不容易去一趟便利店，唉呀（→×哎呀），居然忘了交瓦斯费了。”）そこで本研究では、“哎呀”と比較しながら“唉呀”の持つ意味機能（語義色彩）を明らかにするとともに、“唉呀”と共起する動詞のパターンについても考察する。

・秋山淳（下関市立大学）： VR構文の意味解釈―V＋R（“大”）を一例として―

中国語の結果複合動詞(VR)は因果連鎖(＜ACT＞＋＜CAUSE＞＋＜BECOME＞)の観点から見ると、動作を表す動詞 V(＜ACT＞)と非対格(状態変化)動詞 R(または一部の形容詞)(＜BECOME＞)の組み合わせであり、主語(NP1)の行為が NP2(目的語)に何らかの変化を引き起こす＜CAUSE＞の概念は V にも R にもないと考える。本発表は、V“放/织/做”＋R“大”の VR 構文を一例とする考察を通じて VR 構文の解釈は中国語母語話者の捉え方が影響することを明らかにするものである。

◇2019 年 12 月 7 日（土）福岡大学（文系センター15 階　第 6 会議室）

・董微雨（新潟大学・院）：「開始」を表す方向補語“～上”と“～起来”について

“上”と“起来”の比較研究は数多くあるが、母語話者の語感に基づくものが多く、外国人学習者にとっては理解しにくいかもしれない。また、今まで“上”や“起来”と共起する前項動詞や形容詞に関する研究は多数行われているが、フレーズに関する考察は少ないようである。言語は常に変化している。今まで“去起来”は現代中国語においてほとんど使われていなかったが、近年若者を中心に新しい使い方が見られる。こういった変化を見逃すわけにはいかない。本研究では、若者言葉を対象に取り入れ、“上”と“起来”の意味的相違や使用上の制約要因を考察する。

・楊洋（新潟大学・院）：“在V″と“V着″の使い分けに関する考察

現代中国語において、“在 V”と“V 着”に関する研究は多い(陳明月 1999；石毓智 2006 など)。しかしながら、これまでの研究では両者の使い分けに関して十分に説明されてはこなかった。本研究は、“在 V”を進行相と定義し、“V 着”を持続相と定義する。その上で、両者の語用論的特性と意味的特性の相違について実際の用例を観察しながら分析する。また、文法的意味から両者を定義した上で、共起している動詞及び時間を表す状語を分析する。さらに、使う場面から両者の語用的な特徴を論じ、両者の使い分けについてさらにまとめていきたい。

・王卓（新潟大学・院）：助动词“要”与“想”的比较研究

目前现代汉语语法学界对助动词“要”存在着各种看法（吕叔湘（1980）、马贝加（2002）、刘月华等(2004)、郭昭军、尹美子（2008））。基于先行研究本文认为，“要”可以归结为四个义项。“要 A”表示主语的意愿和要求、打算等。“要 B”表示情理、现实需要或主语的要求。“要 C”表示某种情况趋近出现。“要 D”推测某种情况必然会出现。在表示“做某事的意愿”时，“想”和“要 A”具有很大的可比性。在参考先行研究（张维耿（1982）、蒋平（1983））的基础上，本文认为不可以互换的情况有两种。第一，在表达意愿的程度有所不同的时候两者不可以互换。第二，“要 A”与“想”所接受的修饰副词不同而导致两者在实际运用中不能互换。

・宮下尚子（福岡大学）：近代漢語の三人称代名詞“他/它”における非対称性―『元刊

雑劇三十種』を中心に―

『元刊雑劇三十種』において、“他/它”のふるまいは一・二人称とは異なる。音韻的には“他/它”は『中原音韻』では「家麻韻」に属するが、実際には「歌戈韻」「家麻韻」に属する。次に、一人称が“我、俺、咱”、二人称が“你、恁、您”等のヴァリエーションを持つ一方で、“他/它”は当時三人称代名詞の主流であり、明確な単数複数の概念を伴っていた。また、一・二人称が代替内容を伴った定性であるのと対照的に、“他/它”は代替内容を伴う用例の他、虚詞として疑問詞や名詞に先行したり動詞に後置される等、他の代名詞との非対称性が顕在的である。

・川澄哲也（松山大学）：青海省大通県東部方言調査報告

本発表では2019年8月に行った青海省大通県東狭鎮の漢語方言調査の概要を報告する。前半では、調査で得たデータを示しつつ、当該方言の音声特徴を指摘し、併せて音素分析の試案を提出する。後半では、特に接触に起因する言語変容原理の1つとしてSarah G. Thomasonが提案した“negotiation”を取り上げ、その実態解明に寄与すると考えられる調査事例を提示する。一例を挙げると、土族の漢語話者は比較表現の際、土族語の転移で比較対象を奪格標識saで示す(e.g. 我他sa高。)が、漢族はこの表現法を許容しなかった。この相違は発表者が以前“negotiation”の中身として提出した「目標言語(TL)話者は非TL感の強い変容を受け入れない」という見解を補強する新しい事例であると考える。

・平田直子（北九州市立大学）：『磨光韻鏡』の唐音が反映する音韻体系

『磨光韻鏡』は1744（延享一）年に江戸時代の韻学者である文雄（1700-1763）によって著された韻鏡研究書である。先行研究によると、『磨光韻鏡』の画期的なところは、呉音、漢音に加え、唐音を取り入れて韻鏡研究が展開されたことにあるという。ここでの唐音とは、当時の杭州音であったとされるが、一方で『韻鏡』の枠組みに合わない唐音については矯正がなされた部分もあるということである。本発表では、音韻面からの研究の第一歩として、『磨光韻鏡』の唐音を中古音の音韻体系の枠組みに当てはめ比較対照を行うことで、その音韻体系を明らかにしたい。

会議報告

■ **2019年度第2回理事会**

日時：2019年11月1日（金）16時～18時

場所：お茶の女子水大学 文教育学部1号館1階第1会議室

出席者：大西克也（会長）；三宅登之（副会長）；小野秀樹、加藤晴子、佐々木勲人、竹越孝*、楊凱栄、山崎直樹（以上理事）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；吉川雅之（大会運営委員長）；戸内俊介、野原将揮、宮本徹（以上幹事）

* 編集委員長を兼ねる

■ **2019年度評議会**

日時：2019年11月2日（土）10時15分～11時45分

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟2号館

1 階 102

出席者：構成員 35 名（定数 60 名）

■ 2019 年度総会

日時：2019 年 11 月 2 日（土）16 時 50 分～17 時 50 分

場所：お茶の水女子大学 共通講義棟 2 号館 2 階 201

【議長選出】

議長に遠藤雅裕会員（中央大学）、田中智子会員（神戸山手大学）を選出した。

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 会員動向（10 月 1 日現在）

戸内幹事より以下の報告があった。

・会員数：（2018 年 10 月 1 日から 1 年間の増減：住所不明者、年度末退会予定者を含む）

			増減
総会員数（賛助除く）		1129 名	＋26
	（内訳） 顧問	5 名	±0
	名誉会員	17 名	－3
	通常会員	668 名	＋1
	ネット会員	352 名	＋21
	団体会員	5 名	±0
	海外会員	82 名	＋9
賛助会員		20 社	－2

・〔昨年度除籍者〕63 名（国内会員 45 名 / 海外会員 18 名）［2018 年 9 月 18 日付］

・〔今年度除籍予定者〕67 名（国内会員 55 名 / 海外会員 12 名）

・〔ご逝去〕3 名（古田　敬一名誉会員、塚本慶一会員、柿市　里子会員）

＊ 会員動向については、直近の数字ではなく、4 月 1 日付の状況を春の理事会に、10 月 1 日の状況を秋の理事会に報告する。［除籍者は 10 月中に確定］

1.2. 支部例会関連

戸内幹事より以下の報告があった。

・過去一年間の実績は『中国語学』266 号「彙報」を参照。

・支部例会開催通知はメールに移行中、ハガキ希望の方には郵送を継続（現在 43 名）。

2. 編集委員会報告

竹越委員長より以下の報告があった。

・『中国語学』第 266 号は 2019 年 10 月 31 日に 1, 380 部を発行した。

・学会奨励賞授賞者として以下の 1 名を推薦した。

市原靖久氏（東京大学大学院）

「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」

・日本中国語学会著作権規定の改正について（ニューズレター「資料」を参照）

3. 大会運営委員会報告

吉川委員長より以下の報告があった。

3.1. 委員の交代について

退任：退任：伊藤さとみ（開催校）

新任：塩山正純（次年度開催校）

3.2. 第 69 回全国大会の準備状況

・ワークショップ応募・採択結果

5 月 31 日（金）に応募締切。応募総数 2 件。審議の結果、下記のとおり採用することに決定した（6 月 7 日持ち回り委員会決定）。

(1)「現代中国語の複雑構造における焦点の問題」（企画者：伊藤さとみ会員）

(2)「ユーザー中心の中国語教育文法設計に向けて」（企画者：鈴木慶夏会員）

・研究発表応募・採択結果

6 月 13 日（木）に応募締切。応募総数 79 件。内、有効応募総数 78 件。不受理 1 件（規定違反による失格 1 件）。審査の結果、口頭発表 49 件、ポスター発表 8 件の計 57 件を採択した。不採択数は 21 件であった（7 月 6 日持ち回り

委員会決定)。

・採択者公表後の変更点

7 月 8 日の採択者公表後、発表辞退による変更が 1 件生じた（10 月 23 日)。中国からの発表予定者 1 名（分科会）が、ビザ申請の要件が揃わず来日できないとの理由で発表辞退を申し出たため、大会運営委員会にて審議した結果、分科会から除外した。なお、当人に対しては大会運営委員会名で採録証明書を発行している（9 月 14 日)。また、本件はやむを得ない事情によるものであるため、理由書の提出は求めないこととした（10 月 24 日持ち回り委員会決定。第 3 会場)。

・予稿集について

予稿集原稿は 1 名を除き全て期限内に提出された。遅延者 1 名からは、再設定した期限内に提出された。

予稿集の編集作業には大会運営委員会の委員 4 名が当たった。冊子体は 10 月 31 日に開催校に納品され、電子版は 10 月 28 日に公開された。

・託児所について

託児所については 2 名が利用予定である。

・入構制限について

開催校の規定により、入構に当たっては毎回本人確認が求められた。それに関する注意喚起をプログラムと学会ウェブサイト上で行った。

開催校の環境安全課からは学会名簿の事前提出が要請された。理事会での審議、承認を頂戴した上で学会名簿 1 冊の提供を行った。提供した名簿は会後速やかに返却される。

3.3. 予稿集の電子化について

今年度の大会より予稿集は冊子体の他に電子版でも作成される。電子版は全体不分割のファイルと各論毎のファイルの両方が作成される。

予稿集電子版のファイルには 2 種類の加工を施すことにした（10 月 21 日持ち回り委員会決定)。

(1) ヘッダーに「日本中国語学会第〇〇回全国大会予稿集」の文言を入れる

(2) 改変・改竄を防止するセキュリティをかける

3.4. 第 70 回大会について

・開催校と開催日について

来年度の第 70 回大会は愛知大学名古屋キャンパス（名古屋市中村区）で開催される。開催日は未定。追って学会ウェブサイトで公表する。

・記念大会とすることについて

70 回という節目の大会であるため、記念大会という位置付けにしたい（10 月 29 日持ち回り委員会決定)。そのための予算措置が必要となる可能性がある。必要となった場合は、特別経費補助を補正予算に盛り込んでいただくよう要望する。

・予稿集原稿について

第 69 回大会でも予稿集作成要領から逸脱した原稿が大変多く提出された。第 70 回大会からは予稿集原稿用のテンプレートを用意する。発表者はそれを使用して原稿を作成されたい（10 月 21 日持ち回り委員会決定)。

4. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より編集作業の状況ついて報告があった。

5. 次期大会開催校の決定

大西会長より、愛知大学名古屋キャンパス（名古屋市）において 2020 年 11 月初旬に開催する旨の報告があり、開催校代表の塩山正純会員より挨拶があった。

6. 「第一回中国語学セミナー」開催報告

小野理事（中国語学セミナーWG）より「第一回中国語学セミナー」開催について報告があった。

・2019 年 9 月 7 日（土）13:00～18:00、東京大学本郷キャンパス法文 2 号館教員談話室において開催。

・参加者 67 名（会員 58 名、非会員 9 名）

・会長・講師・WG メンバー・スタッフの 13 名を加えると、合計 80 名。

・参加者のアンケート結果では概ね好評。

・次年度以降も、概ね今年度と同様の方式で、引き続き開催する予定（開催は年 1 回、開催地は原則的に関東と関西を交互に設定する）。

7.「学界展望（語学）」中国語版作成について

佐々木理事より学界展望の中国語訳（《古代文学前沿与評論》掲載、中国社会科学院）作成についての報告があった。

8.「学界展望編集委員会」設置について

大西会長よりこれまでの経緯と現状の説明、「学界展望編集委員会」設置に関する報告があった。

・2019 年度の評議会の承認を以て、委員会に関する内規(1)項による臨時委員会として「学界展望編集委員会」を設置し、2020 年度第 1 回理事会で委員会内規を審議した後、評議会において委員会内規を変更し、常設の委員会とする。

・委員長には 2020 年～2021 年度の理事を充てる。

・委員の任期は 1 期 2 年とし、再任を妨げない。

・本委員会のみの委員は評議会構成員とはしない。

・座長及び現委員のうち 3 名は 2019 年 11 月を以て退任し、現 WG から委員 3 名を新たに推薦する。但し、2019 年度の翻訳に関する業務は旧委員が継続して行う。

9. 国際中国語言学会第 27 回年次大会(IACL-27)開催報告

竹越会員より国際中国語言学会（IACL-27）が 2019 年 5 月 10 日―12 日に無事開催されたこと、国際会議開催支援積立金の使用に関して報告があった。

10. 台風 19 号(会費免除)について

宮本幹事より、台風 19 号に関する会費免除について報告があった。

・台風 19 号は 2019 年 10 月 10 日に発生し、10 月 18 日に特定非常災害に指定、10 月 29 日に非常災害に指定。

・2018 年度第 2 回理事会決定に基づき、「令和元年台風第 19 号」により被災した会員の今年度（2019 年度）分の会費を、自己申告によって免除することとする。すでに納付済みの会費については、2020 年度分の会費に充当する。

【審議事項】

1. 予算案・決算案

1.1. 2018 年度会計決算案（資料参照）

・宮本幹事による報告と説明、及び加藤宏紀会計監査による監査報告があり、報告の通り承認された。

2.2. 2019 年度補正予算案（同上）

・宮本幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2.3. 2020 年度会計予算案（同上）

・宮本幹事による提案と説明があり、原案の通り承認された。

2. 名誉会員の推薦について

名誉会員に荒川清秀会員が推挙された。

3. 役員選挙の結果について

選挙管理委員会の佐々木勲人委員長より、役員選挙の結果について報告があった。

2018 年度会計決算書

2019 年 11 月 2 日総会承認

日本中国語学会2018年度会計決算書（案）（2018年4月1日～2019年3月31日）

〈収入の部〉 単位：円

収入	予算	決算
前年度繰越金	8,811,491	9,572,265
積立からの繰入金	2,600,000	2,600,000
通常会員・海外会員会費収入	6,500,000	5,799,000
賛助会員会費収入	660,000	690,000
『中国語学』売上金	400,000	389,962
予稿集売上金	450,000	604,175
学界展望補助金	300,000	300,000
印税		1,910
通常貯金利子		50
計	19,721,491	19,957,362

〈支出の部〉 単位：円

支出	予算	決算
会誌印刷費	2,000,000	1,388,158
予稿集印刷費	800,000	768,960
大会助成費	300,000	300,000
支部活動助成費	450,000	117,545
通信費	500,000	482,761
事務費	2,000,000	1,885,060
大会事務費	300,000	453,210
学会連合等年会費	42,000	42,000
事務局費	350,000	350,000
編集委員会経費	120,000	120,000
学界展望関連経費	300,000	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000	106,630
ホームページ関連経費	180,000	37,835
大会運営委員会経費	220,000	186,500
辞典編纂委員会経費	180,000	27,620
旅費交通費	600,000	656,480
会議費等雑費	180,000	109,720
学会奨励賞	100,000	0
会員名簿印刷費	900,000	744,120
積立金 [内訳] 記念大会積立金(36万) 事務委託関係積立金(128万) ウェブサイト構築積立金(50万) 国際会議開催支援積立金(50万)	2,640,000	2,640,000
予備費	7,439,491	9,240,763
計	19,721,491	19,957,362

監査の結果、経理内容は適切であり、経理諸表は的確に処理されているものと認めます。

2019年7月19日

2018年度会計監査 小方伴子 印

2018年度会計監査 加藤宏紀 印

2019 年度補正予算案（2019 年 4 月～2020 年 3 月）　2019 年 11 月 2 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	9,240,763
積立からの繰入金	2,640,000
通常会員会費収入	6,000,000
賛助会員会費収入	660,000
『中国語学』売上金	405,032
予稿集売上金	450,000
学界展望補助金	300,000
計	19,695,795

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	300,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望関連経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
国際会議開催支援金	500,000
選挙関連費	100,000
積立金	2,280,000
［内訳］	
記念大会積立金（38 万）	
事務委託関係積立金（130 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（10 万）	
予備費	7,823,795
計	19,695,795

2020 年度会計予算案（2020 年 4 月～2021 年 3 月）　2019 年 11 月 2 日総会承認

＜収入＞	
前年度繰越金	7,823,795
積立からの繰入金	2,280,000
通常会員会費収入	6,000,000
賛助会員会費収入	600,000
『中国語学』売上金	400,000
予稿集売上金	450,000
学界展望補助金	300,000
計	17,853,795

＜支出＞	（単位:円）
会誌印刷費	2,000,000
予稿集印刷費	800,000
大会助成費	300,000
支部活動助成費	300,000
中国語学セミナー開催経費	200,000
通信費	500,000
事務費	2,000,000
大会事務費	300,000
学会連合等年会費	42,000
事務局費	450,000
編集委員会経費	120,000
学界展望関連経費	300,000
ウェブリソース委員会経費	120,000
ホームページ関連経費	180,000
大会運営委員会経費	220,000
辞典編纂委員会経費	180,000
旅費交通費	700,000
会議費等雑費	180,000
学会奨励賞	100,000
会員名簿印刷費	900,000
積立金	2,420,000
［内訳］	
記念大会積立金（40 万）	
事務委託関係積立金（132 万）	
ウェブサイト構築等積立金（50 万）	
国際会議開催支援積立金（20 万）	
予備費	5,541,795
計	17,853,795

例会および全国大会開催のお知らせ

今年度の例会実施予定

各支部における今後の例会実施予定は次のようになっています。

関東支部：2020 年 2 月以降
北陸支部：2020 年 2 月以降

次年度以降もひきつづき支部例会への発表、参会を歓迎いたします。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は、学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介し、年に 2 回発行の学会ニューズレターにも掲載されます。

なお、開催予定は変更になることがありますので、詳細は各支部例会世話人までお問い合わせ下さい。担当者の連絡先については、学会ウェブサイトをご参照下さい。

（事務局）

第 70 回全国大会開催のお知らせ

日本中国語学会第 70 回全国大会は、2020 年 11 月初旬に愛知大学名古屋キャンパス（愛知県名古屋市）にて開催されます。ワークショップおよび一般研究発表の応募要項は 2020 年 4 月初旬までに学会ウェブサイトに掲載される予定です。

（第 70 回全国大会準備会）

『中国語学』電子版発行のお知らせ

今秋発行の最新号（266 号）より、従来の冊子版と平行して電子版を同時発行することになりました。JST（科学技術振興機構）の J-STAGE 上で公開しております。ただし、発行後 1 年間は会員限定の公開としております。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/chuugokugogaku/list/-char/ja

限定公開中の閲覧方法につきましては、e-naf 内に案内を掲示しておりますので、各自ログインの上ご確認ください。

（編集委員会・ウェブリソース委員会）

事務局からのお知らせ

■ **退会について**

退会は会費納付が前提となっています。退会希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、ご連絡をお願いします。

荒屋　勸、泉　興長、乾　俊文、上野　倫代、王　琦、王　巍、賈　智、簡　靖倫、宮　雪、恵　詩文、胡　貴躍、呉　芝蒸、越山　拓馬、沈　德思、蕭　景浚、石　亮亮、銭　金玲、宋　蔚、孫　日環、孫　德坤、孫　婧、張　群、張　茜、陳　陸琴、陳　述、陳　家隽、東　会娟、中野　尚美、馬　勝超、長谷川　龍太郎、林　君穂、潘　瀟、氷野　歩、山下　輝彦、楊　明、楊　立明、楊　洲、李　藝、劉　妍、令狐　菁菁、呂　衛清

（敬称略）

■ 2019 年度会費納入のお願い

会費未納の方には、11月に振込用紙を同封して納入依頼のご連絡をお送りしました。年会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。速やかにご入金下さいますよう、御協力をお願いします。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会

口座番号：00980-6-282216

■ 顧問・名誉会員の推挙

顧問・名誉会員の推挙は、推薦文を添えて2020年9月30日までに学会事務局宛にお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1500円、それ以降は2000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局への問い合わせ

各会員の登録情報は、学会ウェブサイト（https://ss1.xrea.com/www.chilin.jp/）内の e-naf（オンライン会員情報管理システム）から、会員ご自身でログインして確認と更新ができます。事務局への問合せは、学会ウェブサイトの「お問い合わせ」ページをご利用下さい。

［資料］

日本中国語学会著作権規定

第 1 条［目的］

本規定は、日本中国語学会（以下、本学会という。）が刊行するすべての著作物（以下「本著作物」という。）に関する著作権の取り扱いに関する基本事項を定める。

第 2 条［原則］

本著作物の著作者（以下「本著作者」という。）の国籍に関わらず、本規定が定める事項は、日本国著作権法が定めるところにより処理するものとする。

第 3 条［帰属］

本著作物のすべての著作財産権（著作権法第 21 条（複製権）、第 23 条（公衆送信権等）、第 27 条（翻訳権、翻案権等）及び第 28 条（二次的著作物の利用に関する原著作者の権利）が定める権利を含む。）は、本著作物が本学会に投稿された時をもって本学会のみに帰属する。

2. 本著作物が本学会の出版物に掲載されなかった場合、又は掲載されないことを本学会が決定した場合、当該本著作物につき前項を適用しない。

第 4 条［著作者人格権の不行使］

本著作者は、本学会及び本学会が本著作物の利用を許諾した第三者に対し、本著作物の著作者人格権を行使しない。

2. 前項の規定は、本学会が本著作物を原著作物として二次的著作物を作成した場合においても適用される。

第 5 条［著作者による著作物の利用］

本著作者は、当該本著作者が創作した本著作物を利用する場合（第三者に利用を許諾する場合を含む。）、その利用目的等の本学会が別途定める事項を記載した書面により本学会に申請し、その許諾を得るものとする。

2. 本学会は、当該本著作物の利用が、学会の目的又は活動の趣旨に反しない限り、前項に定める本著作者からの申請を許諾する。

3. 第 1 項の規定にかかわらず、本著作者は、次の各号に定める場合には、本学会の許諾を得ることなく本著作物を利用できるものとする。

(1) 本著作者自身が、本著作物を学術的かつ営利を目的としない出版物において利用する場合。

(2) 本著作者個人又は本著作者が所属する法人若しくは団体のウェブサイトにおいて、自ら創作した本著作物を掲載する場合（機関リポジトリへの保存及び公開を含む。）但し、当該本著作物が掲載された本学会の刊行物の刊行後 1 年を経過していること、出処を明示することを条件とする。

(3) 本著作者が大会予稿集に掲載された本著作物を利用する場合。

(4) 著作権法第 30 条から第 50 条（著作権の制限）において許容された利用。

第 6 条［著作者による保証］

本著作者は、本著作物が、第三者の権利を一切侵害していないことを保証する。本条に違反したことが明らかになった場合、全ての責めは本著作者が負うものとする。

第 7 条［紛争解決］

本著作物に関する第三者からの権利侵害又は本著作物による第三者に対する権利侵害等、本著作物に関して紛争が発生した場合又は発生するおそれがある場合、本著作者及び本学会は相互に協力してこれに対処する。

2. 本規定による一切の紛争の第 1 審専属的合意管轄裁判所は東京地方裁判所または大阪地方裁判所とする。

附則

本規定は、2013 年 10 月 26 日より施行する。

附則

本規定は、2015 年 11 月 1 日より施行する。

附則

本規定は、2019 年 11 月 2 日より施行する。

訃　報

本学会名誉会員である古田敬一先生（広島大学名誉教授）におかれましては、2019 年 1 月 4 日に 97 歳の生涯を閉じられました。ここに会員各位にお知らせするとともに、永年にわたって本会ならびに斯学の発展に寄与された先生の多大な功績とご尽力に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2019 年 12 月

日本中国語学会会長　大西 克也

日本中国語学会々報　2019 年秋季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒113-0033
東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学文学部中国語中国文学研究室内
E-mail: jimukyok_clsj@chilin.jp
URL: https://ss1.xrea.com/www. chilin.jp/
発行日：2019 年 12 月 27 日